

「実行機能」の視点を用いた効果的なアセスメント及び支援に関する研究 ー実行機能に困難のある対象者の支援に関する調査からー

○宮澤 史穂（障害者職業総合センター 上席研究員）

渋谷 友紀（障害者職業総合センター）、三浦 卓（元障害者職業総合センター）

1 はじめに

実行機能とは、ある目標を達成するために思考と行動を調整する認知機能のことであり、発達障害、精神障害、高次脳機能障害では、実行機能に困難がみられる場合があることが知られている。また、この実行機能の困難により、職場においては仕事の手はずや段取りが悪い、時間内・期限内に仕事を終わられない、といった課題が生じることが想定される¹⁾。本発表では全国の地域障害者職業センター（以下「地域センター」という。）等を対象に実施した、実行機能に困難が生じている対象者への支援に関するアンケート調査の結果の一部について報告する。

なお、本調査研究では標準化された実行機能のアセスメントであるBRIEF-A²⁾の下位尺度に従い、実行機能を抑制、シフト、情緒のコントロール、セルフモニタ、開始、ワーキングメモリ、計画・組織化、タスクモニタ、道具の整理の9つの下位項目から構成されるものと定義する。

2 方法

(1) 調査対象

地域センター52所（支所を含む）、広域障害者職業センター2所、障害者職業総合センター職業センター

(2) 調査期間

2023年7月～8月

(3) 調査項目

本発表の対象とした調査項目は以下の通りである。

①実行機能に困難のある対象者（以下「対象者」という。）の支援経験の有無

②対象者の支援事例（最大3事例）

各事例について対象者の主な障害種類、対象者に生じた困難、対象者に実施した支援（支援内容、支援の経緯や実施した理由、支援結果）の回答を求めた。

③実行機能に困難のある対象者の支援で苦慮すること

3 結果

(1) 回答状況

55所から回答を得た（回答率：100%）

(2) 対象者の支援経験

実行機能の下位項目に関連した困難の状態像を示し、このような困難のある対象者の支援経験について尋ねたところ、98.2%が「経験がある」と回答した。

(3) 対象者の支援事例

105件の回答を得た。

ア 対象者の状態像

(ア) 対象者の主な障害種類

発達障害が最も多く（47.6%）、高次脳機能障害（26.7%）、精神障害（24.8%）、知的障害（1.0%）と続いた。

(イ) 対象者に生じた困難

対象者に生じた困難について、実行機能の9つの下位項目に対応する11項目の状態像（計画・組織化は多くの要素が含まれるため3つに分割した）を提示し、当てはまるものを全てを選択するよう求めた。最も多く選択されたのは「状況に応じて行動や考え方を柔軟に変えることができない（シフト）」と「感情的な反応を適切に調節することができない（情緒のコントロール）」（それぞれ56.2%）であった（図1）。

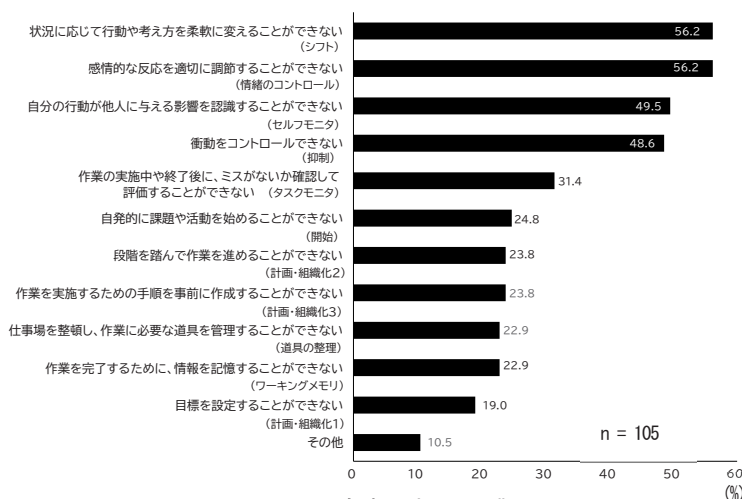


図1 対象者に生じた困難

イ 対象者に実施した支援

対象者に実施した支援に関し、支援内容、支援の経緯や実施した理由、支援結果のそれぞれについて、自由記述で回答を求めた。記述例を表1に示す。さらに、記述の全体傾向を把握するため、設問ごとに記述内容の分類を行った。

(ア) 支援内容

支援対象に焦点を当てて記述内容を分類した。複数の支援対象が書かれている記述については、複数のカテゴリーを適用し、支援対象が明確に書かれていない記述については「不明」とした。分類の結果、対象者に直接働きかけを行った支援（「対象者」）（78.4%）が最も多く、職場の環境調整など、環境を対象とした支援（「環境」）（20.6%）、家族や支援者などの関係者に実施した支援（「関係者」）（18.6%）、不明（4.1%）と続いた。

表1 対象者に実施した支援の記述例

	対象者に生じた困難	支援の内容	支援の経緯や理由	支援結果
記述例1	目の前のことのみに集中するため周囲の状況を把握することが困難。差し込み作業が生じた際に元の作業に戻ることができない。(シフト、ワーキングメモリ)	・単独作業スペースを確保し、余分な情報を遮断した。(環境) ・支援スタッフと相談しながら作業遂行計画をたてるようにした。(対象者)	自らの処理方法に固執してミスが発生する様子があり、支援スタッフとの相談を通じて作業遂行を行うことでミス軽減が図られることが確認されたため。(適応的な行動・反応の獲得)	・周囲から「〇〇さんの作業スペースは確保することが望ましい」と理解を得やすくなった。 ・ミスが減少できたことで「支援者と相談するメリット」を実感することができた。(改善)
記述例2	作業指示を出してもそれをステップに分けて手順を考え作業時間の見積もりなど作業の見通しを持つことができない。その結果、作業を進めることができず、固まってしまうことがあった。(計画・組織化2、3)	メモリーノートを活用し、支援者と一緒に作業の手順を確認した。それを時間ごとに区切り、見通しを立てられるようにした。(対象者)	はじめはご自身のみでメモリーノートを活用して作業を遂行してもらおうと考えたが、ご自身だけだと作業の整理ができなかったため、支援者と一緒にいった。(適応的な行動・反応の獲得)	何度も繰り返すうちに時間はかかるが(1日の作業を組み立てるのに1時間程度かかる)自身で組み立てる方法はわかるようになってきた。ただし、実用的ではない部分が多い。(一部改善)

(イ) 支援の経緯や実施した理由

内容の類似性に基づき記述の分類を行った。複数の経緯や理由が書かれている記述については、複数のカテゴリを適用した。分類の結果、「適応的な行動・反応の獲得」(52.6%)が最も多く、「不適切な行動・反応の消去」(39.2%)、「自己理解促進」(15.5%)、「アセスメント」(4.1%)、「その他」(7.2%)と続いた。

(ウ) 支援結果

記述内容について、課題の改善状況に着目し、事例を「課題の改善がみられた」(「改善」)(33.3%)、「課題の一部に改善がみられた」(「一部改善」)(30.5%)、「課題の改善がみられなかった」(15.2%)、「不明」(21.0%)のいずれかに分類した。「改善」と「一部改善」の合計は63.8%であり、6割程度の事例において支援の結果、何らかの課題の改善がみられていた。

(4) 実行機能に困難のある対象者の支援で苦慮すること

実行機能に困難のある対象者の支援で苦慮することについて自由記述で回答を求めたところ、49件の回答を得た。個々の意味内容の類似性に従い分類を行ったところ、7つのカテゴリに分類された(表2)。最も多かったカテゴリは「対処スキル・対処法の検討・獲得」(25件)であり、対処法の検討に関する難しさや、対処法を本人に受け入れてもらうことの難しさといった内容が挙げられた。

表2 支援で苦慮することの主な内容

カテゴリ	件数	内容
対処スキル・対処法の検討・獲得	25	対処法の検討が難しい
		支援の効果が見えない(検証が難しい)
		対処法の本人への受け入れが難しい
		理解してもらうような説明が難しい
自己理解の促進	17	本人に困り感や課題認識がない 本人の障害理解が進まない
アセスメント	10	アセスメントが難しい 問題が表出する場が限定されている(設定が難しい)
学んだことの実践	10	般化が難しい 対処法を実行できない
関係者に関すること	10	支援者や家族など周囲の負担が大きい 周囲の理解、配慮を得るのが難しい
対象者の具体的な状態像	7	感情コントロールが難しい場合、相談場面で怒ったり感情が乱れて、冷静に話をしたりふり返ることができない。
その他	9	個別性の高い支援が必要(マンパワーが必要) 一貫した対応の必要性

4 考察

本発表では実行機能に困難のある対象者の状態像や、対象者への支援について、回答の全体的な傾向の把握を試みた。

対象者の状態像については、「シフト」や「情緒のコントロール」に関する困難が多く選択された。対象者への支援については、多くの支援で対象者本人への働きかけが行われているものの、環境調整や関係者への支援も行われていることが示された。また、半数以上の支援が適応的な行動・反応を獲得することを理由として実施されていた。

支援結果については、約6割の事例において支援の結果、何らかの課題の改善がみられていたが、課題の改善が見られない事例も一定数報告された。また、支援で苦慮することとして、「対処スキル・対処法の検討・獲得」が最も多く挙げられた。さらに、支援で苦慮することに関する自由記述では、「支援の結果が見えない」という意見もみられている。これらの結果から、実行機能に困難のある対象者の課題を改善することの難しさがうかがえる。

本発表で示した結果は、回答内容の設定ごとの分類にとどまっており、それらの関係性までは分析を行っていない。効果的な支援について検討するためには、今回の分類結果を用い、支援結果と支援内容との関連や、実行機能の下位項目と支援内容の関連等について引き続き分析していく必要があると考えられる。

【引用文献】

- 1) 坂爪 一幸『実行機能と具体的な支援法』,「発達障害白書2019年版」,日本発達障害連盟(編)(2018),p.20-23.
- 2) Roth,R.M.,Lance,C.E.,Isquith,P.K.,Fischer,A.S.,& Giancola,P.R.『Confirmatory Factor Analysis of the Behavior Rating Inventory of Executive Function-Adult Version in Healthy Adults and Application to Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder』,「Clinical Neuropsychology vol 28」,(2013),p.425-434.